

国母選手と、オーストラリアで聞いた話

バンクーバー冬季五輪スノーボード日本代表の国母和宏選手(21)の選手団ユニフォームの着こなしと、その「反省記者会見」についての人々の反応について我がスタッフの意見を聞いて、61歳の僕自身とスタッフたち(平均年齢30代前半)の反応があまりに違うのに驚いた。

僕の反応は「なんだあのガキ。国の税金で国民の代表としてオリンピックに出てくるのに、みつともない！」である。もう少し付け加えれば、個人の趣味については勝手にすればよい。国を代表しようがしまいが、あの記者会見の様子はまさにすねたガキにしか見えない。あれでは彼自身の持つているかもしれない矜持すら示し得ないではないかということだ。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

しかし、そういう僕の反応に、スタッフの反応は総じて冷ややかだ。「スノーボーダーにとってはあれのほうが普通のファッションじゃないですか?」「むしろ、そんなことで『出場を辞退させる』なんて言う方がよっぽど非常識に思えますよ」「なんでこんなに騒ぐのでしょうね。確かに大人気ないとは思うけ

ど、たいした問題ではないのでは:「個人としては友人に対する思いやりのある子のようで、照れ屋なんじゃないですか」

さらに、ある生意気なスタッフは、「社長の21歳の時はどうでしたか?」などと言うありさま。

実は僕自身、この欄の2001年7月号で、野茂、イチロー、新庄たちが日本の野球村を捨て大リーグに挑戦する姿に「往年の名選手」たちがかび臭い俗物オヤジの御託を垂れ流している」と批判したことがある。「それは典型的な形で示された村」社会での多数派による己を危うくするチャレンジャーや新時代を切り開く者へのイジメに見える。同時にそれは現代の日本とその中にある様々な業界(むら)を支配してきたお山の大将たちやその取り巻きたちが、歴史の地殻変動に揺れる砂山の上でうろたえている姿でもある」と思えた。

自らの人生をかけて自らの経営と既得利権にすぎり変化を認めようとしない農業界と闘ってきた世代の方々は、国母選手の振る舞いと我がスタッフたちの言い草をどのような感想を持って聞くのだろうか。

日本の若者に関してもうひとつ話題を提供しよう。以前、オーストラリアの農村を訪ね、農業経営者の話を聞いて回ったことがある。オーストラリアの農場は、ワーキングホリデー制度を使って世界(特に欧米系)から集まってくる若者の労働力で成り立っているといっても良い。たくさん日本人の若者もそれを使ってオーストラリアに渡っている。しかし、同地の農業経営者たちは、口を揃えて「日本人は使いたくない。女の子はともかく特に男の子は要らない」と言うのだ。

彼らは決して人種差別をしているわけではない。その証拠に子供を日本に留学させているという人も少なくない。理由を聞くと、語学能力の問題ではなく、日本人だけで部屋の隅に巣食っているように皆と馴染まないという。日本人の若者が自分を主張できないことを不気味に思うのだろうと思った。記者会見で国母君が、「これが僕自身のスタイルです。競技の結果を見てほしい」とでも言ったのなら、僕は単純に彼を支持したのかもしれない。そして、あのまま彼がメダルを取ったとしたら、日本のメディアが手の平を返したように彼を持ち上げたのであれば、もっと不愉快な気持ちになったのかもしれない。